

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	野間宏『地の翼』論：一九五〇年代の政治と文学
Author(s)	尾西, 康充
Citation	近代文学試論, 59 : 47 - 55
Issue Date	2021-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/53450
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053450
Right	
Relation	



野間宏『地の翼』論——一九五〇年代の政治と文学

尾西康充

1

野間宏の「一条の光線―荒正人氏に―」（『文学界』第九卷第三号、一九五五年三月）は、「あなたの文章を読んで、ほんとうに力を得ました」という呼びかけの言葉からはじまる。野間によれば、自分が「十分生ききっていないと感じていた」のは、「自分が日本に於いて小説の構造を根底から変える力をもっているかどうかを吟味しなければならぬ時期」にきていたからであるとともに、「しばらくの間、自分の能力に疑問をもたされていた」からでもあったという¹⁾。

荒が放った「一条の光線」とは、何であったのか。一九五四年三月、ビキニ環礁での米軍の水爆実験によって第五福竜丸が多量の放射性降下物を浴び、その半年後に無線長の久保山愛吉が死亡した。野間は「人類意識の発生」（『文芸』第一一巻第一四号、一九五四年二月）と「人類の立場」（『世界』第一二〇号、一九五五年一月）のなかで、原水爆による人類滅亡の危機に瀕して「人類意識」が芽生えたと論じた。

野間によれば、「原子力をおどかしと脅迫」に使ったアメリカの指導者に対し、「階級対立のない人類の立場が現実には確立されている」ソビエトでは、原子力発電所が建設された。野間の標榜する「人類の立場」

とは、「原水爆を禁止し、原子力を平和的に利用することによって、人類の無限の発展をひらく」ものであった。今となつては、ソビエトを過度に理想化した発言が誤りであったことは明白であるが、この発言が五年二月のフルシチョフ第一書記によるスターリン批判の前になされていたことを考慮しておく必要があるだろう。

野間と同じように原子力エネルギーの平和利用に期待していた荒は、「野間宏と人類意識」（『文学界』第九卷第二号、一九五五年二月）のなかで、「アベルを殺したカインは宥されるのであろうか」と述べた。原子力の兵器化が認められないのは、それが大量殺戮を招くからではなく、そもそも殺人は許されないからであった。荒によれば、昭和一〇年代には戦意高揚のために、敗戦後は戦争を否定するために、戦争文学が数多く描かれてきた。しかし「それはただ肯定の軸が否定の軸に変わったというだけにすぎず、人類の悪の深部に探針を下してはいない」という。

人類最初の殺人といえる、カインがアベルを殺した動機が嫉妬であったことから、荒は「人が人を殺す、嫉妬の情にかられて兄が弟を殺す、という罪は、原罪以上の原罪ではあるまいか」と問い、その始原に嫉妬ゆえに殺人を犯した人類は「永遠の宿命」を背負っているのだと指摘し

た。このような示唆を荒から受けて、野間は作品のなかに「ひとをたらしだす光」を生み出す方法を模索していたのであった。

この約一年後に、荒の「『政治と文学』に新しい光を／現代の人間の暗い怒りに応えるもの」（『日本読書新聞』第八五〇号、一九五六年五月二八日）が発表されると、野間は、荒の提唱するこの「光」こそ、日本共産党の一九五〇年問題に端を発した「人民文学」と「新日本文学」の抗争を、真の和解に導くものだと考えるようになっていった。

いわゆる五〇年問題とは、GHQの民主化占領政策の下では合法政党とされた日本共産党が、一九五〇年一月にソビエト共産党から平和主義革命路線を批判され、その批判を受け入れない人びと（徳田球一や野坂参三たちの「所感派」）と、批判を受け入れる人びと（宮本顕治や志賀義雄たちの「国際派」）に分裂した事態を指す。六月にはGHQによる党幹部の公職追放がおこなわれると、所感派が中央委員会を事実上解体させ、臨時中央指導部を組織する。この結果幹部の大半は地下に潜ることになる。

このような党の分裂にともなって一二月に文学団体も動揺を生じ、所感派に属する野間や安部公房、徳永直、杉浦明平たちが新日本文学会から独立して、雑誌『人民文学』を創刊した。彼らは宮本百合子が急逝すると、彼女の文学は小市民的な作品であると決めつけ、彼女に「階級的裏切り者」「帝国主義の手先」というレッテルを貼り付けた。

しかし、「百合子祭をポイコットせよ」という指令まで出した「人民文学」グループも、五五年七月の第六回全国協議会（六全協）で所感派と国際派の分裂状態が収まると、新日本文学会に復帰していった。悪罵雑言が飛び交った文学団体の間の抗争について、荒はつぎのように論じ

た。

最も近いものが、最も鋭い形で争い、その結果、最も遠く距たなければならないという事情は、一体どこにその真の原因を求めたらよいのであろうか。これは、論争の方法の改良といったことだけでは解決がつかまい。政治と文学を一元的に統一しても、二元的に分離しても、それで改善されるようには思えぬ。もつと新しい光を呼びださなくてはならぬ。

（「『政治と文学』に新しい光を」）

「もつと新しい光を」という荒の提案に答えようとして、野間はつぎのように自己省察した。

しかし六全協によって明らかにされてきた革命運動のさまざまなか姿は、それまでの私の十分おしはかることの出来なかつたものであり、人類の立場にたつべき革命運動がどのようなあやまりをおかすものであるか、そしてそのあやまりのなかにかこまれてすすんでいた自分がどのようにまたあやまるものかを明るみに出したのである。

（「荒正人の問いの前に立って——人類の立場——、『群像』第一—

巻第七号、一九五六年七月）

さらに「コミンフォルムの無謬神話」を否定したうえで、スターリン批判にも言及する。野間は「私とその前進するものとの間には、なおス

ターリンがおり、日本の革命運動の問題がある」とし、「私はやはりスターリンのあやまりをおかさないうに、また私のあやまりをくりかえさないようにしなければならぬ」とされる。野間によれば、それらの問題を解き明かすために『地の翼』の執筆に全力を尽くしているというのだが、「この作品は私が六全協以前に計画し、書きはじめたものであって、私はなお日本の革命運動のなか深くはいりまることができない部分があるのであるかも知れないと考えている」という。ここで野間が「深くはいりまることができない部分」ととらえているものは何か。野間の作品にしばしばみられる労働者に対するコンプレックスなのか、あるいはこの当時党員であった野間が党を批判することの限界なのだろうか。

『地の翼』は、六全協の二か月後に当たる五五年九月から五七年三月まで雑誌『文芸』に一九回連載され、『地の翼』第一部として単行本化された（五六年二月、河出書房）。続編として「よいどれの時」（『総合』第一巻第六号、五七年一〇月）、「疑惑」（『新日本文学』第一三巻第一号、一九五八年一月）が書き継がれるが、執筆が途絶えてしまう。『地の翼』のなかで野間は「新しい光」——「新しい人類の意識」——をどのように描き出したのか。他方、「深くはいりまることができない部分」とは何であったのか、『地の翼』を分析しながらそれらを検討してみたい。

2

『地の翼』の時間設定は、「昨日ルース台風のはこんできた異常な空気が「十六日の国会」という表現から一九五一年一〇月一六日頃と推

定される。同月一〇日に第二二回臨時国会が召集されており、二六日に衆議院本会議でサンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約が承認された。この作品には、国会情報を共有しながらサンフランシスコ条約反対闘争を展開する党員たちの姿が描かれている。

徳田球一や野坂参三たちの臨時中央指導部は、一〇月一六、一七日、スターリンの作成した「日本共産党の当面の要求——新しい綱領」を国内で確認するために第五回全国協議会（五全協）を召集した。党中央の解体に反対して統一を求める宮本顕治や志賀義雄たちを「スパイ分派」と決めつけて排除していた。アメリカ帝国主義の対日占領政策を糾弾する「五一年文書」と武装闘争の方針を採択し、「中核自衛隊」と称する「人民自衛組織」や山村根拠地の建設を中心任務とした「山村工作隊」が組織されたのである。

崎山晴友と月村久二が属しているK56細胞には、地下に潜っている党員福井の保護と非合法出版物「球根栽培法」の配布が指示される。だが党員の身辺は治安当局——「特審（法務庁特別審査局）」——による監視が強化され、文書配布ルートへの攻撃に加えて、反税闘争を進めている民間関係へも、アメリカ軍の影をちらつかせながら警察や税務署が一体となった介入がおこなわれた。当時は、戦争協力者の公職追放が次々に解除され、その数が一二万二六一名に上るなど、朝鮮戦争勃発以来、「逆コース」が本格化していた時期であった。

戦後党員になった崎山は、教職をレッドパージによって失い、臨時校正の仕事で糊口をしのいでいた。戦時中、内地で同じ部隊に所属していた後藤の家に福井をかくまってもらったのだが、その途端、崎山を監視していた三人の男たちの姿が消える。『地の翼』は、「崎山を取り囲んで

いたものたちの姿は、或る日突然見えなくなった。彼等は急にその見張りの輪を解いて何処かへ姿を消したのだ」というサスペンスさながらの表現ではじまる。地下活動とスパイの疑惑——あたかも推理小説を思わせる展開であるが、同じようなモチーフを描いた小林多喜二「党生活者」（一九三三年）の「どうもおかしいんだ……」、「上田がヒゲと切れたんだ……！」という冒頭近くの言葉を連想させる。

朝鮮戦争が勃発した一九五〇年代と日中戦争下の一九三〇年代の間には、非合法の政治活動をはじめ文学団体が指導するサークル創作活動など、共通する点がみられる。五〇年代の政治状況を背景とした文化現象の研究として、鳥羽耕史『一九五〇年代——「記録」の時代』（二〇一〇年二月、河出ブックス）や道場親信『下丸子文化集団とその時代——一九五〇年債サークル文化運動の光芒』（二〇一六年一月、みすず書房）、宇野田尚哉、川口隆行他『「サークルの時代」を読む——戦後文化運動研究への招待』（二〇一六年二月、影書房）、佐藤泉『一九五〇年代、批評の政治学』（二〇一八年三月、中公叢書）などの優れた研究書が刊行されている。

一九五五年から翌年にかけて花田清輝は、荒や大井広介、山室静、植谷雄高たちとの間でモラリスト論争を繰り広げた。この論争の発端となった座談会「今後十年を語る」（『近代文学』第一〇巻第一一号、一九五五年一月）のなかで、荒は、原子力エネルギーの平和的使用によって生産力が増大することで、『帝国主義戦争を内乱へ』というマルクス主義のテーゼが修正を余儀なくされるとした。山室もまた、労働力が機械に置き換わる時代には、階級闘争を説くマルクス主義よりも、平和的に社会を改革するフェビアン社会主義の方が現実の社会発展を正しく

とらえられるとした。彼らによれば、今後の社会主義運動は『モラルの運動』として展開されるべきで、日本共産党は『モラルの運動の主体』になるべきだとする。それに対して花田は、『プロレタリアートの自然発生的「本能的な欲求」を尊重しストライキを激発させることによって議会主義を打破すべきだと主張したのであった。⁽²⁾

「人類の新しいエネルギーの発見」を「宗教改革」に似た変化」になぞらえる荒からみれば、花田の考え方は「十字軍」時代の考え方のように「古色蒼然」としているように感じられたのであったが、⁽³⁾逆に、一〇年を一つの単位として論じる必要があるとし、三〇年代との比較をふまえながら五〇年代を語ろうとした花田からみれば、荒や山室の発言は「戦前の十年の——一九三〇年前後の知識人のそれに、不思議なほど似ていた」⁽⁴⁾。花田によれば、三〇年前後も「たとえばテクノクラシーなどというものが非常に流行つて、それがなにか解決していく万能のあれみたいなふうなうけとられた」。三〇年代にアメリカのフォードイズムの科学的経営手法がもてはやされたように、原子力エネルギーやサイバネティクス（人口頭脳学）の可能性が過度に吹聴されているという。ちなみにプロレタリア文学の代表作である多喜二の「工場細胞」（一九三〇年）は、工場長が製罐工場で働く労働者たちに「科学的管理法」^{サエツテフィク、マネジメント}や「テイラー・システム」を学ばせ、プロレタリアートとしての階級意識に目覚めないように洗脳していた状況を描いていた。

3

一九三〇年代を彷彿とさせる五〇年代の党活動に触れた『地の翼』で、崎山は、一九四三年夏から冬にかけて「関西の××刑務所の未決拘留監」に収容された過去を想起する——野間自身も同年七月、治安維持法違反の容疑で検挙され、大阪の石切にあった陸軍刑務所に勾留されていた。崎山は党分裂によって、「彼の属していた地区委員会の半数」と訣別せざるを得なかったのではなく、「戦争中ともに留置場拘留監生活をしてきた友」とも別れなければならなかった。

元教員の崎山は、労働者出身で細胞の責任者の月村との間で違和感を抱いていた。月村は、造船所のパージ反対闘争に参加して職場を追われ、今は謄写版原紙に鉄筆で書き入れる『書き屋』として生計を立てていた。

月村と崎山とは同じ細胞K56に所属する黨員だったが、崎山はよくこの労働者出身の月村の前で心を硬くこころざされなければならなかった。それはこの月村が労働者出身だということからおこることかもしれない。労働者出身のものに対する先入観がそうさせるということが言えた。しかし彼はなおこの逆の関係が二人の間にあるかもしれないということ——つまり労働者出身の月村が、崎山に対して同じように劣等感と同時に、反撥をいだくということに考え及ぶことができなかった。

野間の主要な作品において、知識人と労働者が連帯する人民戦線運動

が大きなたまらとされている。だが、崎山は「この街にすむ人々から自分とはなれているという感じ」を抱き、いかに労働者の生活を調べようともその生活を正しくとらえることができないのは「彼の経済学が生きた人間の内容を欠いていたからだ」とされている。崎山が地区委員会に生活調査を進めようとしたとき、「彼の内にあった同じ問題」が「再び同じ形をして繰り返し生まれてくることになる」のであった。月村からみれば、崎山は「教員ふうの議長」でしかなく、闘争を指導する能力のない人間であった。

『地の翼』では、知識人と労働者との違和感とともに、党が分裂した影響を受けて「非合法活動に従っている人間」と「公然と動いている人間」との間で疎遠な感情が生まれていることが描かれている。

崎山は、党の上級機関に属している福井と接するたびに緊張する。福井の初対面の印象は「たたかひの深い経験をもったもののなかにある重み」を感じさせるものであったが、それから「十日ばかりたつたいま」では、それが誤りであったと考えないわけにはいかなかった。彼の「おちついたものごし」は、「彼が自分で採用した事務的な態度」にすぎず、「その彼の事務的な態度は主として合法的な活動に従っているものに対して向けられるもの」であったからである。

福井もまた非合法活動をしている多くの黨員と同じように、合法活動をつづけているものを心の底では軽視しているといえた。（中略）例えばそれは福井が帰ろうとする崎山を部屋の外へおくりだすとき、かなり露骨に外にあらわれた。福井は部屋のなかにつつまたまま、「ああ、ごころうさん」と言って、見下ろすようにして頭

を一寸さげるが、彼のその姿勢のなかには、はっきりと彼の心が動いていた。「どうか気をつけて下さい。」崎山は言っておいて行ったが、彼は福井に期待したものがみだされぬ心をもって歩いて行かなければならなかった。

党が「半非合法の状態」におかれてからは、崎山がかつて地区委員会に所属していたからといって「特別に敬意を払おう」ということはなくなっていた。党分裂によって党员たちの間に深刻な亀裂が広がっていたのである。

4

崎山たちが「正法寺の本堂脇にある小さな御堂の貸部屋の一つ」で細胞会議を開く。非合法出版物の配布とサンフランシスコ条約反対闘争の二つを同時に抱えるのは難しいと話していると、配布の仕事が延期になったと伝えられる。この地区にも「特審」の影がしのび寄っていることを察した崎山の脳裏に、「比馬」という名前の「戦争中彼を取り調べた特高課所属の男」の姿が浮かんだ。このとき崎山は、治安当局によって検挙された外傷体験の記憶が回帰し、強烈な不安に襲われたのであった。崎山の眼からみれば、上部機関の指示待ちの状態になった細胞は、つぎのようにみえた。

もしも細胞が全然他の活動をやめて待機の状態のままですぐす

とすれば、それこそまたひとの眼をひくことになる。なぜといって細胞とはもともと闘争の単位であって、いかなるときにも活動をやることのない組織なのだから。

「闘争の単位」、すなわち「いかなるときにも活動をやることのない組織」であるという細胞の特徴は、『真空地帯』（一九五二年）で描き出された内務班という、陸軍兵営における生活単位を想起させる。野間の代表作となったこの小説では、野戦で編成される戦闘部隊ではなく、内地勤務における内務班の日常が描かれ、軍隊組織に内在する暴力性——『真空地帯』——が明らかにされたのであった。

吉本隆明「戦後文学は何処へ行ったか」（『群像』第二巻第八号、一九五七年八月）は、戦後派作家たちが「転向者または戦争傍観者」であったと看破した。吉本によれば、「地の翼」は「上官ノ命令ハ朕ノ命令」のかわりに、民主的集権を鉄則として社会から観念の柵で隔離された革命組織内の真空地帯をまったく「真空地帯」とおなじ通俗的な外面描写によって、おもしろおかしくかいてみせた作品である。「探偵的な興味で女スパイ党员を追いまわしたり、警察網を採ったりする」ところに作品のテーマがおかれているが、「六全協以降の共産党の方向転換に金しぼりされて政治モチーフを失っている」という。吉本は、「真空地帯」と「地の翼」との表裏一体性こそは、戦後作家が、戦争体験を内部に検証することを怠った盲点をしめす、まことに好個のエクザンブルに外ならない」と痛罵したのである。⁽¹⁰⁾

だが、野間はこの作品で「革命運動のあやまり」に「新しい光」を投じようとしていた。『地の翼』では、指導部会議に所属している飯田が細胞会議で「こんどの綱領はほんといいな……。それはほんとだものな」と発言する。しかしその内容とは明らかに矛盾して、「こんどの綱領によって運動をひろげようとしてるって言っていて、じつさいは、どうしたって、ひろげようとしては思えないがな。……むしろ反対に行ってるがな……。まあ、そりゃあ、そう簡単に行きやしないとは思うがね」と続ける。飯田が言及した綱領とは、おそらく五一年二月二三―二七日に開催された第四回全国協議会（四全協）で採択されたものであったと推測できる。このとき徳田や野坂たち「所感派」は、ゼネストと武装蜂起を主力とする民族解放戦争を提起する「軍事方針について」を決定したのであった。「こんどの綱領」が意味するのは四全協、あるいは、『地の翼』の時間設定と重なる同年一〇月一六、一七日の五全協であったと推定できるのだが、どちらにせよ、飯田が触れていたのは、「軍事方針」に関する綱領であったことは間違いないだろう。

「軍事方針」に即した活動が細胞の重要なミッションであるとするならば、細胞には軍組織に近い任務が担わされていたといえる。福井をかくまってくれている後藤の不安を和らげようとして、崎山が「全く事実がないこと」をいうのだが、それは《党のため、従って革命のため》という理由からであった。この場面では、やにわに作者の視点から「崎山も黨員だから、当然自分の方が相手の人間自身よりも相手を客観的に理解することができるときめこんでいるからだといえるかも知れなかつ

た」と説明されている。このような黨員の優越感、荒正人や平野謙たち近代文学同人が非難したような《政治への機械的な従属》の危険を孕んだものであったといえるのではないか。

さきに紹介したモラリスト論争において、花田の論敵であった大井広介は「文学者の革命実行力」（『美術批評』第五〇号、一九五六年二月）のなかで、つぎのように論じている。

崎山の黨員としての誠実さと献身を読者は疑いはしない。しかし「球根保存法」などを配布したのが、すなわち極左冒険主義であり、いそがしいという福井が、何をしているかといえ、そういう誤った指導にたずさわっている。「党生活者」や「労働者源三」と、その点「地の翼」は性格が違う。主人公はまともなうけとっているが、読者には茶番にみえる。主流派に忠誠だったこの作者が、誤った指導方針が、あたかも有為な崎山に、被害を与えるのを、どこまで辛辣につきこめるか、つきこんで主流派をつき抜けるか。私は興味を抱いて、この長篇をきながく読みつづけよう。⁶⁾

『労働者源三』（一九三三年、改造社）はプロレタリア作家・須井一（谷口善太郎）の小説のことである。引用文中の「主流派」は所感派を指している。大井は皮肉交じりに期待を表明するが、『地の翼』後篇が書き継がれなかったことをみれば、おそらく野間は「茶番」を続けることができなかつたにちがいない。党分裂によって生じた黨員間の疎

隔は、野間の眼には明らかであつたからである。日沼倫太郎によれば、この作品で野間は「党と、党活動をめぐる人間関係のどすごろいデイスビュート」に目を向けはじめ、「人間の深部においてゆく」ことができず。しかし「党と党をめぐる人びとたちの諸矛盾、光と影の部分」を描きつづけることができたのだろうか。日沼は、野間が黨員作家であるがゆえに「ごまかしなしに組織と人間の不正をあばくときに、黨員であることと芸術家であることとの自己矛盾をかんじないか」という作家の限界を指摘したのである。⁽⁷⁾これは野間自身が「深くはいりきることができない部分がでてるかも知れない」と考えていた内容と重なるだろう。だが、作品にはもう一つ別の限界があつたのではないか。それはかつての労働運動とプロレタリア文学に孕まれていたジェンダー不平等の問題である。

『地の翼』構成上の大きな特徴は、月村と隆子、崎山と雪村あやめの男女の対照的な組み合わせであるといえる。月村は、製本屋に務める隆子のなかに「烈しいもの」を感じ、彼女の「迫力」を前にして緊張する。その理由は「彼女のとりだす理論がいつも男たちよりも一貫しているために、会議の際に男たちは自分の発言の前に、まず彼女にいかにか批判されるかを考えなければならぬような状態」におちいるからなのか、あるいは「彼女のいかなるときにもあわてることのない冷たい眼が、男たちの利己心にみちた心のなかをするどく見ぬきつづけているかのよう」に思える」からなのか、いずれにせよ「何か彼の手では解くことの出来ない、不可解なもの」が彼女の内側に存在していると感じていたのであ

つた。

他方、「区民週報」の編集者であつたあやめは崎山たちからスパイ——「緋文字（姦通）」——と疑われている。地下に潜っている幹部の妹だという噂のある彼女には離婚した過去があつて、彼女の身持ちの悪さから地区委員会のみならず都委員会でも活動に乱れが生じていたとされる。崎山も彼女から「何かいやな、恥ずべき肉の臭気が辺りにするかのよう」な「雰囲気を感じとっていた。彼女は、福井が潜伏している後藤の家をのぞいていたにもかかわらず、不審な男に尾行されていたという嘘をついたのである。これら男女の組み合わせは、蔵原惟人が「芸術的感想についての方法（前篇）」（『ナツプ』一九三二年九月）のなかで「『愛情の問題』そのものがプロレタリア文学の中心的主題になることはないのである」ときつぱりと否定した『愛情の問題』のテーマにながつてしまふのである。ここでも三〇年代の文学の再帰がうかがえるのだが、運動の綻びの原因を女性に帰するというのは、いかにも通俗に随しているだけではなく、平野謙・荒正人と中野重治との間でおこなわれた政治と文学論争（一九四六年）を想起させるような、ジェンダー不平等という死角を抱えた一部のプロレタリア文学の再生産になる危険が存していたといえよう。

注

『地の翼』の本文は、単行本『地の翼』（一九五六年二月、河出書房）に拠っている。

(1) 荒正人「アベル殺し」（『近代文学』第七巻第四号、一九五二年四月）

- (2) 花田清輝「日本における知識人の役割—その功罪の歴史的展望」(『知性』第三卷第三号、一九五六年三月)、引用は『花田清輝全集』第六卷(一九七八年一月、講談社、二九頁)からおこなった。
- (3) 加藤周一他「座談会 今後十年を語る」(『近代文学』第一〇卷第一一—号、一九五五年十一月、六頁)
- (4) 前掲(2)、二二頁。
- (5) 吉本隆明「戦後文学は何処へ行ったか」(『群像』第二二卷第八号、一九五七年八月)、引用は『吉本隆明』第四卷、二〇—四四年九月、晶文社、四四七頁)からおこなった。
- (6) 大井広介「文学者の革命実行力」(『美術批評』第五〇号、一九五六年二月)、引用は『文学者の革命実行力』(一九五六年四月、青木書店、三一ページ)からおこなった。
- (7) 日沼倫太郎「『地の翼』の問題」(『文芸首都』第二六卷第五号、一九五七年五月、一三七頁)

(おにし やすみつ、三重大学人文学部教授)